

Das Leben und Werk von Hermann Hesse

ヘルマン・ヘッセの生涯と作品

99k1020

市川温子

目次

1	Hermann Hesse の生涯	1
2	Hesse の主な作品	1 1
3	Hesse と東洋	1 8
4	ドイツ語まとめ	3 1
5	参考文献	3 3

1 Hermann Hesse の生涯



早熟な幼年時代

Hermann Hesse (ヘルマン・ヘッセ) は1877年7月2日月曜日、夕方6時半、Württemberg 州 Nagold 河畔に6人兄弟の長男として生まれる。ヘッセは、この小都市 Calw を「世界で最も美しい町」と称えている。父 Johannes Hesse、母 Marie は、海外布教師の指導をする伝導会の仕事に従事していた。1881年 Basel に転居し伝導会付設の学校「少年の家」に入学する。ヘッセはこの頃から既に、厳しい自己批判と自己統一への意志、強い自意識と強烈な感受性を持っており、母マリーはヘッセについて「非常に知恵のつき方が早い。大変利口で面白い子だが、我意ときかん気とは時々手に負えない、またひどく激することがある」「この児にはある巨人的な力、強力な意志があり、また驚くべき悟性がある」

って、命が縮むほどです」と旅先の夫に宛てた手紙に書いている。(ヘッセ S 23,24) ヘッセは絵や音楽にも優れた素質を持っており、自分で詩を作り、それにメロディをつけて歌ったりしていた。

神学校脱走前後

1888年 Reallzeum (現在の Gymnasium 上級クラス) 入学する。1890年、エリートの集まる神学校の入学試験にそなえるため、ヘッセは親元を離れ、Göppingen のラテン語学校へ入れられる。彼があまりにわがままなので、父母は教育的見地から彼を外に出したのもあった。この頃から、「詩人になるか、でなければ、何にもなりたくない」と思うようになる。1891年9月、Maulbronn 神学校に入学し全寮制の寄宿生活が始まる。ここでの生徒の生活は、厳格に規制されており、勉学も休養も睡眠もいっさい一緒に、且つきちんと定められた時間に行われ、常に監視されていた。1892年の3月7日、Maulbronn 神学校を脱走する。発作的な行為に過ぎなかったが、先生たちから危険人物として白眼視されるようになり、ヘッセは心身のバランスを失い不眠症とノイローゼに悩むようになり、結局その5月に退学し牧師のもとに預けられるが、精神衰弱のため自殺未遂をしてしまう。年上の女性への失恋が直接の原因であった。11月、Cannstatt の Gymnasium に転入学する。同級生より2つくらい年長で、古

典語はずば抜けていたが、フランス語や幾何では全く遅れていて、ついて行くのが重荷であった。教科書を売ってピストルを買うなど、混迷を重ね、11ヵ月で高校生活に終止符を打った。そしてすぐ本屋で見習い店員となるが3日で逃げ出し行方をくらました。Calw の家に戻ってからは、庭師事や、父の仕事を手伝い、そして暇な時間には、祖父と父とのおびたしい蔵書の中から本を読みあさるという日々を過ごした。

作家としての出発

1894年、Calw にある Heinrich Perrot の塔の時計工場で見習い工になる。肉体的に苦しく、精神的にも屈辱であったが、現実の生活は彼を鍛えた。詩人には自分の力でなるほか仕方がないことを悟ったのである。1895年、大学町 Tübingen の Heckenhauer 書店で働き始める。神学校をまともに卒業していたらその大学で勉強するはずであった。この書店の仕事は神学、哲学、法学の分野で、非常に広範な、豊富な在庫を持ち、また製本業も兼ねておりヘッセはこの仕事に満足していたようである。そして、将来、詩人又は著述家として立つ場合に必要な諸条件を熱心に知ろうとした。1898年11月、詩集「Romantische Lieder(ロマン的な歌)」を、出版してくれる本屋が見つからずに自費出版する。しかし、600部のうち、53部しか売れず、惨澹たるスタート

であった。1901年11月、「新進ドイツ抒情詩人」シリーズの第3巻として、「Die Gedichte (詩集)」を刊行する。初めて出版の依頼をされた作品である。1902年、母マリーが死ぬ。ヘッセは母の危篤を知らされていながら、その場にいることに耐えられず、死に目に会わなかった。また、葬儀にも参加しなかった。詩集の巻頭にある、「Meiner lieben Mutter (いとしい母に)」という編は、詩集の発刊を見ずに亡くなった母に捧げた詩である。1903年2月、文筆で立つ決心をしてそれまで働いていた Wattenwyl 古書店を退職する。1904年2月、「Peter Camenzind (青春彷徨、郷愁)」を刊行する。この教養小説は清新な文体とみずみずしい生活感情によって大きな反響を呼び、ヘッセは27歳にして一躍人気作家となる。迷いを重ねたわりには、早い春であった。8月2日、Maria Bernoulli(マリア・ベルヌリ)と結婚し、Boden 湖畔の Gaienhofen に住み始める。マリアはヘッセよりも9歳年上で、体格でも、気質でも、音楽に対する情熱的な愛情という点でも、ヘッセの母を思い出させるものがあったという。1905年10月、「Unterm Rad (車輪の下)」を刊行し、1910年秋、「Gertrud (春の嵐)」を刊行している。9月4日～12月1日、画家 Hans Sturzeneger(ハンス・シュトゥルツェンガー)とアジア旅行をする。Ceylon、Malaysia、Singapur を経由し Sumatra まで行っている。9月、Schweiz の Bern 近郊に妻子とともに転居し以後、生涯スイスに住むことになる。ピアニストで芸術家気質のマリア夫人の

うつ病がつのって家庭は危機に直面する。1914年3月、「Roshalde (湖畔のアトリエ)」に刊行したこの小説にはヘッセ自身の結婚生活に対する苦悩が書かれている。

第一次世界大戦を越えて

8月、第一次世界大戦に際し、兵役を出願し徴兵検査を受けるが、極度の近視のために不合格となる。1915年7月、「Knulp (クヌルプの生涯の3つの物語)」を刊行する。その後、戦争捕虜救援活動を開始している。10月10日、Neue Züricher Zeitung (新チューリヒ新聞)に発表したエッセイ「再びドイツで」に、都合の良いことには兵役に就かずに済んだ、と受け取られかねない表現が含まれていたため、ドイツの諸新聞にセンセーションを巻き起こし、ドイツから「売国奴」「兵役忌避者」などと非難され、マスコミからボイコットされてしまう。その為ヘッセは窮地に陥ったが、平和主義の立場を繰り返し、同時にドイツの捕虜たちを慰問する文庫のために献身的に働き始める。同じ主張をし、同じように戦争犠牲者のための奉仕をしていた Romain Rolland (ロマン・ロラン) は、ヘッセに共鳴して友情を結ぶことになる。それは孤立していたヘッセにとって大きな心の支えとなった。二人の親交は、ロマン・ロランが第二次大戦の末期に死ぬまで続いた。1916年「Schön ist die Jugend (青春は美わし)」を刊

行している。1月、再び徴兵検査を受けるが、今度は肺気腫が見つかり不合格となってしまう。3月、父 Johannes (ヨハネス) が死亡し、自分と同じようにひとりぼっちで誰からも理解されていないと感じていた父の死が、ヘッセにひどい打撃を与えた。そして心労から神経症が嵩じ Carl Gustav Jung (カール・グスタフ・ユング) の弟子である Josef Bernhard Lang (ヨーゼフ・ベルンハルト・ラング) 医師のもとで治療を始める。後にユングと出会い、作品に大きな影響を与えられるようになる。1919年2月初め、「Zarathustras Wiederkehr: Ein Wort an die Deutsche Jugend. Von einem Deutschen (ツアラトウストラの再来: ドイツの青年に一言 — ドイツ人より)」を第一次世界大戦終結直後の1月に2晩で書き上げ、匿名で刊行する。生きる目標を失っていた大戦後のドイツの青年たちに向けて書かれ、大きな共感と反響を巻き起こした。

再出発

1919年4月、戦争捕虜救援活動の公務をようやく解かれる。しかし、そのとき、妻マリアは神経障害で入院していて、3人の子どもは知人や寮にあずけられていた。ヘッセは文学の仕事は何よりも優先するために家族と別れ、Montagnola の Casa Camuzzi に部屋を借り再出発をはかる。多くの随筆や水彩画はこの家の眺めのいい露台から生まれたものである。結局ここに1931年8

月まで住むことになる。6月、「Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend. (デーミアン ある青春の物語 エーミール・シンクレア編)」を刊行する。そして「Märchen (メルヒェン)」を刊行する。この作品は18の小品を収めている。その中の「少年の日の思い出 クジャクヤママユ」は、第二次大戦後まもなく日本の中学校の教科書に取り入れられ今日に至っている。1920年1月、Baselの美術館で最初の水彩画展を、3月はLuganoで、1922年1月にはWinterthurで水彩画展を行っている。ヘッセが水彩画を始めたのは、ひとつには大戦中の精神的疲労や、創作からくる目の疲れを癒すためであり、また戦争捕虜救援の活動資金を得るためでもあって、生活上の必要に迫られたものであった。



Casa Camuzzi (カムッティ邸) 絵 Hermann Hesse

10月、「Siddharta(シッダールタ インドの詩)」を刊行する。1923年7月、マリア・ベルヌリと離婚し、6ヵ月後の1924年1月、ヘッセより20歳若

い Ruth Wenger (ルート・ヴェンガー) と結婚する。しかこの結婚はうまくいかず、まもなく Basel の町で別々の生活を営む形だけの夫婦になってしまう。そして 1927 年 5 月、ルート・ヴェンガーと離婚する。6 月、「Der Steppenwolf (荒野の狼)」を刊行している。1925 年に書かれたこの作品は、ナチス政権の誕生前に既に警告を発して第二次世界大戦を予見している。また、50 歳を前にしてきわめて危機的な精神状態にあった自己を容赦なくあばいてみせた、いわばヘッセの自画像的作品である。1930 年 7 月、「Narziss und Goldmund (知と愛)」を刊行する。「車輪の下」とともに、Maulbronn が舞台となっている。1931 年 11 月 14 日、生涯の伴侶となる Ninon Dolbin (ニノン・ドルビン) と Montagnola で結婚する。ニノンは、「Peter Camenzind」に感激した 14 歳の頃から、ヘッセと文通をしていた。端麗で理知的で教養の高いニノンはヘッセにとって最良の秘書となり、よりよき伴侶となった。彼女を得たことにより、それまで不安定だったヘッセの生活や創作は安定し、円熟していくことになる。1932 年 3 月、「Morgenlandfahrt (東方への旅)」を刊行する。1939 年、第二次世界大戦が勃発する。ドイツではナチスによってヘッセの作品が「望ましからぬ文学」とされ紙の配給を停止されてしまう。刊行停止や絶版にならなかった作品も、売り上げの利益は為替管理の名目で、ヘッセには支払われなくなる。1942 年、成立年代順に配置された、ヘッセ初の抒情詩の集大成「Gedichte (全

詩集)」をスイス版著作集として刊行する。1943年11月、「Glasperlenspiel - Versuch einer Lebensbeschreibung des Magister Rudi Josef Knecht samt Knechts hinterlassen enschriften, herausgegeben von Hermann Hesse (ガラス玉遊戯 - 遊戯名人ヨーゼフ・クネヒトの伝記の試み クネヒトの遺稿を添えて ヘルマン・ヘッセ編)」を刊行する。

晩年

1945年2月、未完の長編「Berthold (ベルトルト)」を刊行する。5月、第二次世界大戦が終わりを迎える。1946年8月28日、Frankfurt 市のゲーテ賞を授与される。これはヘッセにとって、ドイツからの初めての文学的評価であった。そして11月はじめ、ノーベル文学賞を受賞する。これによりヘッセの著作がドイツで出版されるようになる。ノーベル賞についてヘッセはすでに、これまでに繰返し幾度も指名されていたのだが、そのたびに Stockholm のドイツ公使によって妨害されていたのである。ノーベル賞を受賞したことにより、ナチス時代には彼から遠ざかっていたドイツの出版社たちが彼に群がるようになり、彼の許可も受けずにその著作を印刷していった。12月、政治的エッセイ集「Krieg und Frieden (戦争と平和)」を刊行する。ヘッセは、この作品の中で自分の政治的考えを一部の非難に答えるために急いで出版した。それはヘッセ

が安全なスイスにいて、全体の混乱から退いたただの傍観者にすぎなかったのではないかという嫌疑に答えることと、もう一方ではナチスの政治と戦争をただ沈黙したその態度によって支持したのではないかという疑いに対してであった。そしてこの作品は、ロマン・ロランにささげられた。1947年、Calw 市の名誉市民となり、また Bern 大学第一文学部より名誉博士号を授与される。1951年11月、Suhrkamp (ズーアカンブ叢書)の第一巻として「Morgenlandfahrt (東方への旅)」を刊行する。1952年5月、「Gesammelte Dichtungen(全作品集)」全6巻を刊行する。1954年4月、Pour les merites(プール・ル・メリト 西ドイツ平和功労賞)を受賞する。1955年10月ドイツ書籍販売業平和賞を授与される。1956年6月、社団法人 Baden、Württemberg 州、ドイツ芸術振興協会が「ヘルマン・ヘッセ賞」を創設し、総額5万マルクに及ぶ「苦境にある詩人のためのドイツ連邦諸州のヘルマン・ヘッセ義援金」が創設されている。1957年5月、「Gesammelte Dichtungen (全作品集)」に第7巻を増補して、「全著作集」全7巻を刊行する。1962年7月、Montagnola 市がヘッセに名誉市民権を与える。幾つもの大きな賞を得たヘッセだが、痛風や眼病のため、大作を書くことを断念し、多くの読者に心のこもった手紙を書き続けた。そして庭仕事を楽しみ、竹や椿や柿の木を育てていた。8月9日、Montagnola の自宅で85年の一生を閉じた。

2 Hesse の主な作品

「Peter Camenzind」

ヘッセの初期を代表する小説「Peter Camenzind」は、日本では「郷愁」あるいは「青春彷徨」の邦題で親しまれている。1901年から1903年にかけて書かれたものであり、1904年、ヘッセ27歳の年に出版された。ヘッセにとって最初のこの長編小説は、たちまち大きな反響を呼び、彼の最初の成功作となった。そして、一躍人気作家になった。「これまで私に絶望していた親族や友人たちも今は親しげに私にほほえみかけた。私は勝ったのだ。」(ヘッセ S 70) とヘッセは後に語っている。

アルプスの小村に生まれた Peter Camenzind (ペーター・カーメンツィント) が、都会へ出て青春を過ごし、最後は生まれ故郷に戻るという、青春遍歴が描かれている。旅をして、不幸な恋をして、どこが自分の生きる世界なのかをつきつめている。この作品は彼の作品の中でも、伝統的な「教養小説 (Bildungsroman)」に近いものとされる。教養小説とは、主人公が人生の途上で数々の体験を重ねていくことによって、内面的に成長し自己形成していく様子を断続的に描いていくドイツ文学特有の一ジャンルである。

この作品が書かれた当時のドイツは、一路、第一次世界大戦への軍国主義の道を進んでいた。また、産業革命による都市の発達によって荒廃する自然を守

ろうとする運動の起こった時代で、ちょうどワンダーフォーゲル¹の運動もこの時代に生まれた。

「Unterm Rad」

ヘッセが Maulbronn 神学校での体験を小説にした「Unterm Rad」は、世界中で広汎な読者を獲得した「学校小説」の名作である。日本ではこれがヘッセの作品中最も多く読まれている。Gienhofen に住んでいた時代に書かれた作品である。書き始めたのは、まだ Gienhofen の新居に移る前、1903年から1904年にかけて、場所は Calw の父親の家である。当時は、教育問題が国内で激しく論じられ、他の著名作家もこの問題を扱っていた。ヘッセ自身、Maulbronn 神学校の規則づくめの息苦しい教育方針に苦しみ、初期の他の作品の中でも学校教育の欠陥などを指摘している。大きな反響を呼びヘッセの文名を確かなものにしたが、神学校を逃げ出した不心得な少年をかばい、教師を非難する内容を持つためしきりに罵られたりもした。

とある田舎町の優等生 Hans Gibenrath (ハンス・ギーベンラート) が、州の試

¹ ワンダーフォーゲル (Wandervogel) 本来は「渡り鳥」の意味である。山野をめぐり歩いて心身を鍛えることをめざすスポーツで、19世紀末、K.Fischer が全ドイツの徒歩旅行団体を結集して名づけたことに始まる。

験に2番で合格するが、エリート神学校入学後の寄宿生活の中で授業やクラス
の仲間から取り残され、やがては退学する。結局、工場の見習い奉公に出てま
もなく、徒弟仲間の酒宴の帰りに仲間からはぐれて川で溺れ死ぬ。主人公のエ
リート・コースからの脱却からその没落への物語として描かれた作品である。
この主人公ハンスがたどったてん末は、その死を別にすればほぼヘッセが歩ん
だ道でもあった。ヘッセ自身が、「Unterm Rad」で押しつぶされた主人公のハン
ス・ギーベンラートでもあり、Maulbronn 神学校に堂々と反逆し、そこを去って
行った Hermann Heilner (ヘルマン・ハイルナー)でもあったのである。

「Knulp」

3部構成の短編小説である。ヘッセの作品はしばしば3部構成という形式を
とることがある。「早春」「クヌルプ」「最期」という題名の3章から成っている。
出版は1915年5月だが、作品の完成はそれより早く、まず第3部の「クヌ
ルプの思い出」が1907年に、第1部「早春」が1913年に、第3部「最
期」が1914年にできておりそれぞれ雑誌に発表されていた。「クヌルプの思
い出」は、ドイツの雑誌に発表されてすぐ、日本の雑誌「スバル」1909(明
治42)年1月1日発行の第1号に「友」という題で訳されている。これが日
本で紹介された一番最初のヘッセの作品である。

この作品は、1980年代の始まりの時期、遍歴職人クヌルプの登場をもって始まる。ヘッセがこの作品の冒頭にわざわざ1980年代と明記しているのには意味がある。19世紀の末 Berlin に起こったワンダーフォーゲルの波は、たちまちドイツ全土に広がり、この運動はやがて大きな組織になり力をも有するようになる。ヘッセは、このように集団で事をなすのが嫌いであった。それ故、時代を同一にしながらも、あくまでもオーソドックスな旅人を設定し、彼に自らの内面を表現させている。そして「Knulp」執筆の終了後に第一次世界大戦が始まっている。

「Demian」

発表と同時に異常な反響をドイツ全土に巻き起こした作品である。1917年の秋に数ヶ月のうちに執筆され、1919年6月 Emil Sinclair (エーミール・シンクレール) 作として出版された。しかし、後に文芸評論家がエーミール・シンクレールはヘルマン・ヘッセに違いないと発表したために、ヘッセもそれを認めて1920年の第9版からヘッセの名で発表した。また「Demian」発表後すぐに与えられた Berlin 市の新人文学賞「Fontaine (フォンターネ賞)」を返却している。シンクレールという名は、ヘッセの傾倒した詩人 Hölderlin (ヘルダーリン) の友人の名前である。あえて自分の名前で発表しなかったことにつ

いて、ヘッセは「私は匿名のおかげでほぼ一年間、名声にも、敵視にもわずらわされずに、他人の名で自分の思想や空想を述べることに成功した」(Die Nürnberger Reise) と後に述懐している。

「Demian」は、主人公シンクレールが次第に自己自身に目覚めて、自分自身への道を見出し、最後に第一次世界大戦が勃発してそれに従軍して重傷を負う、それまでの精神的発展を描いた作品である。いわゆる小説らしい事件はほとんどなく、抽象的な心理的発展が扱われている。執筆当時ヘッセは、第一次世界大戦で平和の貴さを訴えたために、かえってドイツ人の反感を買い、「裏切り者」よばわりをされ心に大きな傷を負っていた。また、1916年には、父の死、妻の精神状態の悪化と入院、三男の脳膜炎など身边にも不幸が続き、身も心も疲れ果て、ユング派心理学のラング博士に精神分析の治療を受けていた。そのため、この作品はユングの深層心理学の影響が著しく表れている。

「Siddharta」

2部から成るこの小説は1922年に刊行された。第1部は1919年から20年の冬の時期に短期間で書かれたが、第2部が書き始められるまでにはそれから1年半がかかっている。ユングの影響や、著名な中国思想研究家でいとこの Wilhelm Gundert (ヴィルヘルム・グンデルト) との出会いに触発されたこ

とにより、1922年に執筆を再開し5月に完成した。「Siddharta」はヘッセの生前に作品の舞台となったインドで7つの言語に訳されるなど、世界的規模の反響を呼んだ。とくにアメリカでは「Der Steppenwolf (荒野の狼)」とともに1960年代から爆発的に読まれ、300万部を超えるベストセラーになった。

この作品は、紀元前5～4世紀の古代インドを舞台に、バラモンの青年シッダールタの若き日からその老齢にいたるまでの生涯を描きだしている。ヘッセは「人間はいかにして真の自己となるか」というテーマに向き合っており、哲学的思索面の強い作品となっている。また、「Siddharta」の持つ東洋的な思想とその美しさにおいて、もっとも重要なものの1つにその独特な文章のリズムがある。インドの僧が儀式のときに同じ文句を3度ずつ、言い方を変えて繰り返し唱えながら、それに合わせて足踏みの調子を整えるが、その言葉のリズムがこの作品に用いられており、この作品に高い魅力と完成度とを与えている。

「Glasperlenspiel」

「Glasperlenspiel」は「ガラス玉遊戯 遊戯名人ヨーゼフ・クネヒトの伝記の試み クネヒトの遺稿を添えて (H・Hesse 編)」という長い表題を持つ長編小説で、1931年から11年の歳月をかけて書かれたヘッセの総決算とされている大作である。執筆当時55歳だったヘッセは完成時には66歳となっていた。20

世紀最大の傑作の一つとも称えられている。ヘッセはその後も詩や随想、多数の手紙を書いているが、小説としてはこれが最後の作品で、これによって 1946 年にノーベル文学賞を受けている。

ドイツ文学伝統の教養小説の形をとりながら、内容的には未来小説、あるいはユートピア小説ともいうべきものになっている。全体の構成は、「ガラス玉遊戯」成立の歴史的経緯とそれが行われる、世俗から隔絶した未来の文化的共同体カスターリエンについて説明した序章、そのカスターリエンの精神を体現する歴史的人物である主人公ヨーゼフ・クネヒト（クネヒトは「下僕」の意味）の伝記を語る 1 2 章の本編、それにクネヒトが残した 1 3 篇の詩と 3 篇の履歴書とからなり、これらをヘッセが編集した形をとっている。頹廢した現代文明を克服して確立された未来の精神の理想郷とされるカスターリエンには、現代文明に対するヘッセの独自の文明批判が反映されている。そしてこの作品には、全篇にわたって西欧的伝統とその英知とに、東洋的神秘と英知とが見事に結合している。

「ガラス玉遊戯」とは、序章によれば、哲学、数学等の学問と音楽等の芸術を総合し、瞑想を通して学芸を宗教的境地にまで高めるものである。この遊戯は、音楽と数学の特殊な符号と数式を用いて、あらゆる学問、芸術を理解し表現しようとするものである。

ヘッセがスイスの小村 Montagnola の家にこもってこの作品を書き続けた 11 年間は、ドイツで Adolf Hitler (アドルフ・ヒトラー) 率いるナチ党が台頭し、そして、やがて没落していった 11 年間でもあった。政治情勢ゆえこの作品はドイツでは出版できず、1943 年 11 月にスイスで刊行された。

3 Hesse と東洋

ヘッセの作品には、東洋的雰囲気や漂わせているものや、東洋世界、東洋思想を題材にしているものがしばしばある。そこで、ヘッセと東洋とのつながりに注目してみる。

ヘッセの家系

ヘルマン・ヘッセと東洋とのふれあいは、彼が生まれた時から始まっていた。彼の家族自体がすでにインド大陸と深い縁で結ばれていたからである。

ヘルマン・ヘッセには、父方に同名の祖父がいた。この祖父は、母方の祖父 Hermann Gundert (ヘルマン・グンデルト) と同じく敬虔主義派の信徒で、前部インドの伝道に活躍したヨハネス・ゴスナーの聖書によって信仰に入った。母方の祖父グンデルトは Maulbronn 及び Tübingen で学び、一時は熱狂的な汎神論者であったが、改心してインドでの異教者伝道に生涯を捧げる決心を固めた。2

1歳の時に英国の義歯製造工場主グローブの家に家庭教師となったが、グローブは義歯製造の仕事の他に、インドの植民地に福音書を普及することをまた一つの職業にしていた。それで、若いグンデルトは、この人とともに英国からボンベイ、セイロン、マラバルなどへ旅行した。この旅行でグンデルトは自分の言語学上の才能を発見した。またたくまに彼は5つから6つのインドの方言を学び、しかもまもなくヒンドスタニ語、マラヤラム語、サンスクリット語で原住民に説教できるほどに熟達した。グンデルトはついに、インドにおける敬謙主義派の伝導の草わけの一人となった。後にイギリス伝道団から Basel 伝道団の勤務に移り、この団体のマラバル伝道の最も重要な代表者となった。そしてマラバルで結婚し、幾人かの子どもが生まれ、その中にヘルマン・ヘッセの母マリーもいたのである。グンデルトは60歳の時に健康を害し、Calw へ帰って来た。ここで彼は重要なインド語の研究、特にマラヤラムの百科辞書を完成すべき委託を受け、30年かかって完成した。グンデルトのマラヤラム語辞書は最古の一冊であるのみならず、今日に至るまでの最も重要なものの一つである。また、彼は最初のマラヤラム語文法を作った。インドの最南部ケララにはグンデルト博士の記念碑が作られている。グンデルトの孫の Wilhelm Gundert (ヴィルヘルム・グンデルト) は旧制水戸高等学校のドイツ語教師として日本に滞在し、神道を研究した。ナチスの時代に迎えられて、Hamburg 大学学長になった

人物である。

ヘルマン・ヘッセの父ヨハネスは、高等学校上級生の時、Baselの伝道教会へ手紙を送って、既に2年前から神学の研究に志していて、伝道によって主に仕えたい旨を述べている。はじめは生徒として、ついで館長の秘書として、伝道館に4年とどまった後、インド伝道に向かった。しかしインドの気候に3年しか耐えられず郷里に戻り、そしてCalwにやって来た。ヘルマン・ヘッセの母マリーはインドのタラチェリで生まれた。3歳から15歳までをヨーロッパで過ごし、15歳で再びインドに行き、父母と共に伝道と教育の仕事にあたったが、17歳でヨーロッパ、Calwに帰ってくる。そして英国人と結婚し、3度目にインドへ渡るが夫の死後、父グンデルトのもとへ帰って来た。1874年、先夫の2児を連れてヨハネス・ヘッセと結婚する。2人の間に生まれた4人の子どものうちのうちの長男がヘルマンである。

母も長い間インドにいたので、マラヤラム語やカナラ語で話したり歌ったりした、魔術的な外国語で老いた父と話し合っていた。祖父のように、母も時として異国の微笑、知恵を含んだ微笑をたたえることがあった。 (ヘッセへの誘い S 343)

この神や、なお他の神が私の幼年時代のめんどうをみてくれ、私
が読み書きのできないずっと前からもう、東洋の非常に古い比喻や
思想を私に詰め込んだので、私はその後インドや中国の賢者と出会
うたびに、それを再会のように、帰郷のように感じた。

(ヘッセへの誘い S 344)

これがヘッセにとって東洋の原体験であった。もっとも、この頃の彼の中で
は、東洋世界といっても神秘的なイメージを持つおぼろげな像にしか過ぎなか
った。しかしこの幼年期の原体験が、後の彼の積極的な東洋受容のための精神
的基盤となったのである。また、1884年(明治17年)Baselの伝道館に日
本のすぐれたキリスト者新島襄が訪れて来た。7歳のヘッセは、最初に見た日
本人ニイシマから強い印象を受けたことを晩年に感慨深く語っている。

アジアへの旅

1911年、子どもの頃から憧れていたアジアへ友人とともに出かけた。旅費
不足や赤痢にかかってしまったことによりインドには行けず、セイロン、マレー
シア、シンガポール、スマトラを旅している。そこでヘッセは、東洋が自分とっ
ては全くの異郷であることに気がついたのである。彼がこの旅行で目にしたもの

は、植民地として列強諸国に痛めつけられた東洋であって、ヘッセが抱いていた東洋のイメージとは全くかけはなれていたのである。

私たちはここでは異郷の者であり、市民権を持たない。私たちはとっくに樂園を喪失し、私たちがあらためて獲得しようとする新しい樂園は、赤道の下にも、暖かい東の海のほとりにもなく、私たちの心の内に、私たち自身の北国の未来の内にあるのである。

(ヘッセへの誘い S 350)

現実の東洋を知ったヘッセは大きなショックを受け幻滅した。しかしそれが彼の中にある変化をもたらした。「樂園」というイメージで東洋を見ることは、西洋人が一方的に作り上げた観念を異文化に押し付けることにすぎず、またそうした姿勢は、異文化を「西洋人という観察者のための」存在としてとらえている。

無数の他の旅行者とおなじく、わたしもいかにしばしば、異国の民族やその都市を、ただ珍奇なものとして観察し、すべてが興味深い、われわれに根本においては何のかかわりもない動物園でものぞくように、のぞいていたにすぎなかったことか！

(ヘッセへの誘い S 352)

幻滅の原因が他者にあったのではなく、自分が一方的に作り上げた東洋像の方にあったのであり、自分の意識下には「西洋人としての優越感」が潜んでいると痛感したのである。これを自覚したヘッセは、これまでの優越感を離れ、アジア世界をあるがままに受け入れ評価した。

南部インドの回教徒は誇らかに自意識を持ち、落ち着いて歩んで行く中国人は快活でしかも品位を保ち、体の小さくやせたセイロン人は少女みたいに臆病で、きれいなマレー人は如才なく、勤勉な日本人は背が小さく賢かった。彼らは皮膚の色や姿形は夫々に非常に違っていたけれども、みんなある共通なところを持っていた。彼らはみんなアジア人だった。私達がベルリン又はストックホルムから来ようと、チューリヒまたはパリまたはマンチェスターから来ようと、そんなことは関係なく、我々みんなまちがいようもなく、不思議なふうと同じ種族に属し、ヨーロッパ人であったのと同様であった。

(ヘッセ S 82)

しかもヨーロッパ人が共通なものを持ち、アジア人はアジア人として共通なものを持ちながら、

そういうものを越えて共通の所属性と共同性、即ち人類が存在するということ、そのことを私は時おりあらゆる感覚を通じてじつに新鮮に経験し得たのであるが、この経験こそ一層美しく、私にとって限りなく重要なことであった。そんなことは誰でも知っている。しかし本でそれをよむのでなく、全く他郷の民族と共に、目と目でそれを体験するということは、何ととっても無限に新しく貴重なことである。 (ヘッセ S 83)

これがヘッセがこの東南アジア旅行で得た最も大きな貴重な体験であった。しかし彼は、その後の人生において、再びアジアの地を踏むことはなかった。アジア旅行後の彼の東洋に対する関係を見てみると、ほとんど文献的なもののみに限られている。確かに、アジア旅行後、彼の関心領域は旅行前に比べて一段と広がりをみせ、インドのみならず、中国、日本へと及ぶことになるが、それでも彼が触れた東洋の文化といえは、儒教や老荘思想といった古典文献が中心なのである。

西洋世界への懐疑と精神的東洋世界

ヘッセはプロテスタントの、なかでも厳格な信仰をもって知られた敬虔派に属する家庭で育った。しかし彼自身は家族の信仰心には強く影響を受けたものの、教会等の形式性については早くから疑問を抱いていたようである。

日曜ごとの礼拝、堅信礼を受けるための聖書講読、子どものための教義問答などは、なんの体験もわたしにもたらしてくれなかった。

(ヘッセへの誘い S 345)

確かに神様は存在するでしょう。しかもお母さんが心に思い浮かべておられるような存在かもしれません。でも僕は関心がありません。こういうやり方で僕を感化できるなどと、思わないで下さい。

(ヘッセへの誘い S 345)

と1893年1月、母への手紙で述べており、神への不信感を募らせていることがわかる。また、西洋文明に対する不満と反感も抱いていた。ヨーロッパの各地ですでに自動車や鉄道が実用化し始め、都会には工業と人口が集中して大量生産を可能にし、地方では都市化と開発が進んでいた。しかしこうした文明の発達と

は裏腹に、物心両面の機械化がもたらす疎外感が人々の間で言いようのない不安を呼んでいたことも事実である。彼はこのような西洋社会の合理主義と商業主義に反発を覚えていた。1896年2月、両親への手紙にこう書いている。

私たちの文明全体がモルヒネに侵されているのです。私はせかせかと動く影法師や結核患者のように生きたくありません。いいえ、あたたかく、真実をもって、澁刺と生きたいのです。

(ヘッセへの誘い S 347,348)

こうしたキリスト教と西洋文明に対する懐疑がヘッセの眼を東洋に向けさせていた。そしてアジア旅行によって西洋世界に必要なものが何かを精神的東洋世界に見出したのである。

全東洋は宗教を呼吸している。西洋が理性と技術を呼吸しているように。(…)私たちの文明の技術や優越はいたるところで認められる。そしていたるところで、東洋の経験な民衆が、私たちに欠け、それゆえにこそ私たちが技術的な優越よりもあがめているものの恩恵を享けているのが眼にとまる。これを東洋から輸入しても、イ

ンドや中国に回帰しても、あるいは何らかの形に組織されたキリスト教体制に逃避しても、何の益もないのは明らかだ。しかし同様に明白なのは、ヨーロッパ文化の救済と存続が、精神的な生の技法と精神的な共有財の再発見によらないでは不可能であるということなのだ。 (ヘッセへの誘い S 354)

ヘッセは「ヨーロッパ文化の救済と存続」のために東洋の思想を糧としたのである。西洋世界に必要なのは、精神性の復活であって、東洋という異文化を理解することではなかったのである。

東洋の思想

アジア旅行後、精神的東洋世界に重点を置くようになったヘッセはインド思想のみならず、中国思想にも共感を寄せ、儒教や老荘思想なども積極的に学び始める。その影響は「Märchen」に収められている「詩人」や「Klingsors letzter Sommer」の他、当時書かれた大小さまざまなエッセイに見られる。中でも最大の成果は「Siddharta」である。「Siddharta」創作中の1922年2月、ヘッセはある読者の手紙に対する返事の中で次のように述べている。

もし私の本の中にあなたを引きつけるものがあるとしたら、おそらくあなたは時とともにごく自然に統一の思想へ近づいて行くでしょう。そして老子や仏陀やその他の賢人、聖者を見出し（この人たちは救いをもたらす唯一のものとしてではなく、道として、しばしの先導者として、敬えばよいのです）、そして聖書、とりわけ新約聖書も以前とは全く違った読み方をするようになるでしょう。

（ヘッセへの誘い S 357）

ここでヘッセは東洋思想を、西洋にとってのある意味で最大のアイデンティティーであろう「聖書」の解釈をも変容させてしまう契機として捉えているのである。人は異文化との接触によって自文化のアイデンティティーを根底から揺さぶられるものであるが、ヘッセはそれを肯定的に捉えている。彼は「Siddharta」の完成後も自らの東洋文化に対する理解に満足せず、さらに中国や日本の文化に積極的に関わっている。彼が親しんだ古典には、唐代の詩文芸のほか、春秋などの史書、莊子や列子、孟子、そして易教や禅まで含まれている。その探求の成果は「Morgenlandfahrt」や「Glasperlenspiel」に活かされている。

東西の架け橋

ヘッセと東洋は思想上のつながりが主だったが、そこから生まれた作品によってヘッセは多くの東洋の友人を持つことになった。ヘッセが直接会って親しく交流した日本人も少なくないし、その相手は研究者に限られない。文通ともなれば、それこそ高校生や学生たちから寄せられる手紙の一つ一つに真摯な返事を送り続けたのである。

たとえばインドでは、「Siddharta」がヘッセの存命中に7つの言語に訳されるほどの反響を示したが、この作品を通して生まれた歴史家カリダス・ナグとの友情はよく知られている。ナグは、ヘッセが1922年に Lugano の国際会議で「Siddharta」を朗読した際、理解を示した数少ない聴衆の一人だった。会議の翌日、ナグはヘッセの家を訪問したが、その様子は「インドからの訪問」に描かれている。

そのインド人（ナグ）は、美しく親しみのこもった微笑をたたえた。たちまちのうちに、私たちは友達となり、たちまちのうちに心を打ち明けあい、お互いに自分のことを知らせ合った。もうこれほどの喜びは久しく味わっていない。

（ヘッセへの誘い P357）

ナグモヘッセとの友情を「私たちの時代に生じた、東洋と西洋とのかけ橋」と呼んでいる。ヘッセは自身一番キリスト教に近いと言いながらも、その仏教や東洋精神への理解と洞察は最も東洋的であるといえる。その意味でヘッセは西洋と東洋の文化の融合に貢献した、優れて先駆的な代表者といえるであろう。

ヴィルヘルム・グンデルトの言葉によると、フランス人の占い女が、ヘッセについて何の予備知識もなしにヘッセを相してこういったそうである。

あなたはこのヨーロッパでは他国人 (stranger) です。あなたの前生はヒマラヤ山中の隠遁者で、岬々たる岩石の間に住み、緑の牧場や美しい花などを愛していた方だったのですから。

(ヘッセ S 132)

4 ドイツ語まとめ

Hesse wurde am 2. Juli 1877 in Calw geboren. Sein Vater hieß Johannes Hesse. Er war ein evangelischer Missionar. Seine Mutter hieß Marie. Der Vater hat als Missionar für kurze Zeit in Indien gearbeitet. In Calw hat er als Gehilfe seines Schwiegervaters Hermann Gundert im Calwer Verlagsverein gearbeitet. Hermann Gundert war ein Schulgründer. Hesse hat unter ihrem Einfluss gestanden und hat sich für Asien interessiert. Im Jahr 1911 reiste er mit dem Maler Hans Sturzenegger nach Ceylon, Malaysia, Singapur und Sumatra. Im Jahr 1913 publizierte er die Aufzeichnungen seiner Ostasienreise "Aus Indien". Im Jahr 1922 publizierte er "Siddharta". Der Schauplatz des Buchs ist Indien, und es wurde in 7 Sprachen in Indien übersetzt. Er hat sich auch für die asiatische Geisteswelt interessiert, die seine Bücher beeinflusste. Im Alter hat er Bambusse und Tsubaki gezüchtet.

Im Jahr 1891 kam er ins evangelische Klosterseminar Maulbronn, aber am 7. März floh er daraus. Er entschloss, entweder Dichter oder gar nichts zu werden. Am 20. Juni 1892 beging er einen Selbstmordversuch. Im Jahr 1904 publizierte er "Peter Camenzind". Das war sein erster großer Erfolg als Schriftsteller. Er heiratet seine erste Frau, Maria Bernoulli. Hesse hat drei Mal geheiratet. Seine erste Frau, Maria Bernoulli, war neun Jahre älter als Hesse, und hat drei Kinder geboren. Seine zweite Frau hieß

Ruth Wenger. Sie war zwanzig Jahre jünger als Hesse. Im Jahr 1924 heirateten sie, aber nach drei Jahren liessen sie sich scheiden. Seine dritte Frau hieß Ninon Dolbin. Sie hatte mit Hesse Briefwechsel, seit sie 14 war. Sie heirateten im Jahr 1931. Im Jahr 1905 publizierte er "Unterm Rad". Das Buch beschreibt Erziehungsprobleme. Es ist das populärste Buch von Hesse in Japan.

Im Jahr 1914 brach der erste Weltkrieg aus. Hesse meldete sich zum Wehrdienst, aber wurde als dienstuntauglich zurückgestellt. Er arbeitete bei der Deutschen Gefangenenfürsorge bis 1919. Im Jahr 1919 publizierte er "Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend". Hesse entdeckte das Malen.

Hesse wurde nervenkrank. Die Ursache war der Tod des Vaters, die Schizophrenie seiner Frau und eine ernste Krankheit des jüngsten Sohnes Martin. Im Jahr 1916 liess er sich von Josef Bernhard Lang behandeln. Weil Lang ein Mitarbeiter von Carl Gustav Jung war, hat Hesse Jung getroffen. Und Hesse hat ziemlich unter seinem Einfluss gestanden.

Im Jahr 1929 galten Hesses Werke als unerwünschte Literatur in Deutschland. Verschiedene Werke durften nicht verlegt werden. Im Jahr 1946 können Hesses Werke wieder in Deutschland publiziert werden. Er bekam den Goethepreis der Stadt Frankfurt und den Nobelpreis.

Am 9.August 1962 stirbt Hermann Hesse in Montagnola.

5 参考文献

5、1 辞書

広辞苑 (1 9 5 5) 東京 : 岩波書店 新村出 編

新アポロン独和辞典 Neues Deutsch-Japanisches Wörterbuch (2 0 0 0) 東京 :
同学社

日本国語大辞典第二版第十二、第十三巻 (2 0 0 2) 東京 : 小学館 日本国語
大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部

5、2 書籍

井手賁夫 (1 9 9 0): ヘッセ 人と思想 8 9 . 東京 : 清水書院

佐古純一郎 (1 9 9 2): ヘルマン・ヘッセの文学 . 東京 : 朝文社

高橋健二 柴田泉 櫻井寛 (1 9 9 2): ヘルマン・ヘッセへの旅 . 東京 : 新潮
社

ヘッセ研究会・友の会 (1 9 9 9): ヘッセへの誘い 人と作品 . 東京 : 毎日
新聞社

Hermann Hesse (1 9 5 1): 車輪の下 . 東京 : 新潮社 訳 高橋健二

Hermann Hesse (1 9 9 8): ヘッセ魂の手紙 . 東京 : 毎日新聞社 編訳ヘルマ
ン・ヘッセ研究会

5、3 インターネット

<http://www.educ.ls.toyaku.ac.jp/~s967067/Hermann-Hesse-1>

<http://www.h5.dion.ne.jp/~diyberg/contentslinks.html>

<http://www.h5.dion.ne.jp/~diyberg/>